

SONIC CITY

2025 SERIES

2:00pm, March 28th (SAT),
2026

154

ソニックシティ 2025シリーズ 第154回さいたま定期演奏会
2026年3月28日(土) 午後2時開演 / ソニックシティ 大ホール

第154回さいたま定期演奏会 日本フィルハーモニー交響楽団

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲第5番《皇帝》変ホ長調 op.73 (約40分)

Ludwig van BEETHOVEN: Concerto for Piano and Orchestra No.5 "Emperor" in E flat major, op.73

～休憩(20分)～

ベートーヴェン

交響曲第5番《運命》ハ短調 op.67 (約38分)

Ludwig van BEETHOVEN: Symphony No.5 in C minor, op.67

指揮：**尾高 忠明**

Conductor: OTAKA Tadaaki

ピアノ：**牛田 智大**
ともはる

Piano: USHIDA Tomoharu

コンサートマスター：**扇谷 泰朋** [日本フィル・ソロ・コンサートマスター]

Concertmaster: OGITANI Yasutomu, JPO Solo Concertmaster

主催

公益財団法人埼玉県産業文化センター / さいたま市 / 公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団

後援

埼玉県 / 埼玉県教育委員会 / さいたま市教育委員会 / 埼玉県吹奏楽連盟

協賛

FV ジャパン株式会社

表紙作品提供

埼玉県立新座総合技術高等学校 デザイン専攻科 今田 優歩

作品名「FLOW」

作者コメント「流れる音をイメージしたことから作品名はFLOW。

音の抑揚を感じるような画面構成を意識し制作しました。」

【アンケートのお願い】 今後のソニックシティ主催公演参考のため、アンケートへのご協力をお願いいたします。アンケートにお答えいただきました方から抽選で3名様に本日の出演者尾高忠明氏と牛田智大氏のサイン色紙をお送りいたします。右の二次元コードより、スマートフォン・タブレットからお答えください。(所要時間約5分)



▶本公演は最終楽曲が終了し、指揮棒が下りて以降は写真撮影が可能です(アンコールは除く)。撮影はスマートフォン・携帯電話をご使用いただき、自席にてご着席のままお願い致します。撮影時は周りのお客様へご配慮いただきますようお願い致します。



©Martin Richardson

指揮：尾高 忠明

1947年生まれ。国内主要オーケストラへの定期的な客演に加え、ロンドン響、ベルリン放送響など世界各地のオーケストラへ客演。これまで91年度第23回サントリー音楽賞受賞。93年ウェールズ音楽演劇大学より名誉会員の称号、ウェールズ大学より名誉博士号、97年英国エリザベス女王より大英勲章CBEを、さらに99年には英国エルガー協会より、日本人初のエルガー・メダルを授与されている。2012年有馬賞(NHK交響楽団)、14年北海道文化賞、18年度関西音楽クリティック・クラブ賞本賞、大阪文化祭賞、日本放送協会放送文化賞、19年第49回JXTG音楽賞洋楽部門本賞を受賞、21年

旭日小綬章を受章。

現在NHK響正指揮者、大阪フィルハーモニー交響楽団音楽監督、札幌響名誉音楽監督(この4月より桂冠指揮者)、東京フィルハーモニー響桂冠指揮者、読売日響名誉客演指揮者、紀尾井ホール室内管弦楽団桂冠名譽指揮者、東京音楽大学付属オーケストラ・アカデミー音楽監督、「東京国際音楽コンクール<指揮>」審査委員長、東京藝術大学名誉教授、相愛大学、京都市立芸術大学客員教授、国立音楽大学招聘教授、桐朋学園大学特命教授に就任。日本芸術院会員。



©Ariga Terasawa

ともはる ピアノ：牛田 智大

2012年、クラシックの日本人ピアニストとして最年少12歳でユニバーサル ミュージックよりCDデビュー。リリースしたCDは2015年「愛の喜び」以降、続けてレコード芸術特選盤に選ばれている。デビュー後は、全国各地でソロリサイタルを行うほか、オーケストラとの共演も多く、シュテファン・ヴラダー指揮ウィーン室内管(2014年)、ミハイル・プレトニョフ指揮ロシア・ナショナル管(2015年/2018年)、小林研一郎指揮ハンガリー国立フィル(2016年)、ヤツェク・カスプシク指揮ワルシャワ国立フィル(2018年)、トマーシュ・ブラウネル指揮プラハ交響楽団(2024年)、アンナ・スウコフス

カ=ミゴン指揮ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団(2025年)各日本公演のソリストを務めたほか、全国各地の演奏会で活躍。2024年からは室内楽プロジェクトも展開しており、意欲的な活動に更なる注目が集まっている。

2018年第10回浜松国際ピアノコンクール第2位。2019年第29回出光音楽賞受賞。2025年第51回日本シヨパン協会賞。江副記念リクルート財団第53回奨学生。

礎 ～音楽の礎、人生の礎～

ベートーヴェン ピアノ協奏曲第5番《皇帝》変ホ長調 op.73

作曲は1808年から09年にかけて。ところが作曲者であるルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン(1770-1827)が住んでいたウィーンがナポレオン・ボナパルト(1769-1821)による軍事占領を受けたこともあり、公開初演は1811年にずれこんだ。

そしてこの頃からベートーヴェンは、『交響曲第7番』等に聴かれるように、リズムに溢れた祝祭的な作品を多数書くようになる。「暗から明へ」、あるいは「闘争を経て勝利に至る」という、彼自身が打ち立てた作品の展開パターンを越えてゆくかのように。

たしかにこのピアノ協奏曲にも、これまでのベートーヴェンが書いた同ジャンルの作品以上に、明るさや躍動感が満ちている。それがいきなり発揮されるのが、第1楽章の幕開けだ。ピアノ独奏で協奏曲が始まるというパターンは、『ピアノ協奏曲第4番』でも実践済みだが、『ピアノ協奏曲第5番』では「ジャン」というオーケストラの華々しい和音に先導され、華麗なピアノリズムが炸裂する。しかも変ホ長調という調性は元々、英雄や君主の凱旋を象徴する輝かしさを具えていると考えられてきた(だからこそ「皇帝」という愛称が生まれたのだが、これはベートーヴェン自身の命名ではない)。

あるいは第2楽章。同じ2番目の楽章であっても、『第4番』では不安と悲哀に満ちた響きが溢れていたが、『第5番』では平安や憧れが満ち溢れている。そして、この至福の楽章は途切れることなく、躍動感に溢れたフィナーレの第3楽章へと続き、しかもこの楽章の最後ではティンパニとピアノの掛け合いが耳を奪う。

奇しくも1812年は、「フランス皇帝」として現世を謳歌したナポレオンが失脚への道を辿り始めた年。それに代わるように、「皇帝」の愛称を戴き、以降ピアノ協奏曲の礎と称賛されることになる『ピアノ協奏曲』が華々しく登場した。

ベートーヴェン 交響曲第5番《運命》ハ短調 op.67

西洋音楽史上、ピアノ協奏曲をはじめ様々なジャンルで革新的作品を発表したベートーヴェンだが、とりわけ交響曲の分野で彼が打ち立てた功績は大きい。元々交響曲はオペラや芝居の序曲から派生し、第1楽章や最終楽章は演奏会の開幕や終了を告げる役割を担っていた。ところが、彼はそうしたあり方を一変させてしまった。

特に『交響曲第5番』は、そうしたベートーヴェンの交響曲の特徴が明確に刻印された作品である。何よりも、「暗から明へ」あるいは「闘争を経て勝利に至る」という、ベートーヴェンの作品を語る際によく用いられる表現が典型的にあてはまる。「運命」というタイトル自体は、第三者の後付けによるものだが、まさに運命との闘いを彷彿させるかのような内容であることには間違いない。

もちろんそれにあたっては、作品そのものの中に書かれた音楽的な仕掛けも、大きな役割を果たしている。例えば第1楽章冒頭のリズム。「運命が扉を叩く」と伝えられてきた、お馴染みの「□タタタ／ターン」である。この「□タタタ／ターン」が、全曲を通じて刻々と表情を変え、これでもかと繰り返される中で、第4楽章への圧倒的な凱歌が出現する。第3楽章から第4楽章へ至る緊張感に満ちた暗から明への展開、またその効果を最大限引き出すべく、両楽章を中断無しに繋げるという手法も、革新的なものだった。

こうした途方もない内容ゆえに、作曲にも長い年月が要された。何しろ着想から4年を経、試行錯誤の末に1808年によく曲自体が完成されたのもその表れ。いずれにしてもこのようにして『交響曲第5番』は、聴く者に人生の戦い方をも示すかのような、音楽史上稀に見る革命的な作品と化した。

曲目解説：小宮正安

オペラと音楽

2025年10月、新作オペラ「平家物語」の初演が、大宮ソニックシティの主催によって行われました。それを記念して今シーズンのコラムでは、日本フィルさいたま定期演奏会で取り上げられる作曲家と「オペラ」や「歌」の関係にまつわるエピソードをお届けします。

ベートーヴェンとオペラ



『フィデリオ』大詰めにおける救出シーン。
パリのテアトル・リリックにおける上演の様様。1860年。

今シーズンのコラムでも度々書いてきたように、音楽家たるものオペラで成功すべしという伝統は、ベートーヴェンにも大きな影響を与えた。それが証拠に、彼は生涯唯一となるオペラ『フィデリオ』を遺している。生涯唯一となったのは、このジャンルに興味がなかったからではない。大変な気合を入れて書いたにもかかわらず、失敗やトラブルが重なり、それでも再起を期して改訂を続けた結果、約10年もの歳月を要してしまったからだ。

『フィデリオ』は、元々『レオノーレ』というタイトルだった。初演は1805年、

場所はウィーン中心街の外に位置する一般市民向けの私立劇場＝アン・デア・ウィーン劇場。

そんな劇場にふさわしいオペラの演目とは何か？フランス革命やナポレオンの台頭といったニュースが、ヨーロッパ全土に日々もたらされた時代である。そうした中、無実の事件に巻き込まれるものの、危機一髪の場面で救出されるという内容の演劇やオペラが、人気を博していた。『レオノーレ』も文字通り、そうしたトレンドを映し出した内容だった。

だがこの作品が初演された際には、折しもナポレオン率いるフランス軍がウィーンを占領していた。ドイツ語で書かれたこの作品を理解できないフランス兵が客席に陣取ったため、公演は大失敗に終わる。それでもベートーヴェンはめげずに様々な改訂を施し、翌年に同劇場で再演にこぎつけるものの、今度は劇場経営者との金銭トラブルを起こしたことで公演は打ち切られてしまった。

その後、ベートーヴェン自身さらなる改訂の上で再演を考えていたところ、ウィーンの名門宮廷劇場の1つであるケルトナー門劇場から上演依頼が舞い込む。台本は、宮廷劇場関係者によって入念に改められた上、ベートーヴェン自身、「改作」とでも呼ぶべき作業にとりかかった。そしてこの時、(ベートーヴェンの本意ではなかったが)タイトルも『レオノーレ』から『フィデリオ』に改められ、大成功を収める。

ベートーヴェンのような強烈な個性の持ち主でも、すんなりとは行かないオペラの世界。それでも彼を捕らえ続けたオペラの魅力／魔力が、よく分かる。

第154回さいたま定期演奏会に寄せて

この度は第154回さいたま定期演奏会の開催を心よりお慶び申し上げます。

今回、ステージ左側には樹齢約300年の一位(イチイ)の盆栽を展示させていただきました。本作は幹に右側に大きく流れるような白く枯れた舍利(シャリ)を抱えており、厳しい自然環境を幾年にもわたって耐え抜いた様子がうかがえます。

右側には、樹齢約100年の沈丁花(ジンチョウゲ)の盆栽をご用意いたしました。こちらは崖に種が零れ落ち、幹や枝をしならせながらも耐え忍ぶ半懸崖の樹形に仕上がっております。香りが大変よく、日本の最大香木の一つとしても名高い木でございます。

オーケストラによる演奏と只今の季節ならではの植物の表情をお楽しみいただけましたら幸いです。

盆栽清香園 山田寅幸



さいたま定期演奏会 2026 シリーズ開幕記念・スペシャルイベント
ウェルカムコンサート アフタートーク

13:30 ~大ホールロビーにて 鈴木優人・Cocomiによるトークイベント

JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA - SAITAMA SERIES CONCERTS at SONIC CITY 2026

生

vol. 155 生命の躍動 人生への感謝
2026年5月30日(土) 14時開演
13:30より「ウェルカムコンサート」/ 終演後に「アフタートーク」開催

演奏曲
ベートーヴェン 交響曲第6番「田園」
メンデルスゾーン 序曲「フィンガルの洞窟」
ライネッケ フルーツ協奏曲

出演
指揮 鈴木優人
フルート Cocomi



© Ahnang Inc. © Marco Borggreve



OFFICIAL SITE

SONIC CITY SERIES 2026

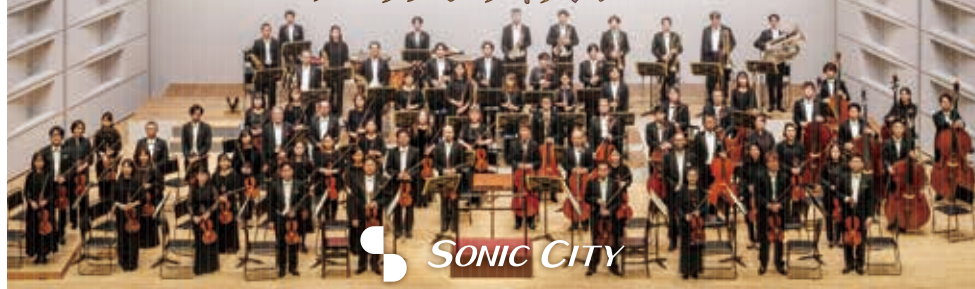
日本フィルハーモニー交響楽団さいたま定期演奏会

主催：(公財)埼玉産業文化センター、(公財)日本フィルハーモニー交響楽団、さいたま市 | 後援：埼玉県、埼玉県教育委員会、さいたま市教育委員会、埼玉県吹奏楽連盟

全席指定・税込 S席6,000円 | A席4,500円 | B席3,500円 | Ys席(25歳以下限定)2,000円



ソニックシティ大ホール



SONIC CITY

